

グローバル化の流れに逆行した日本の現状

—世界市民意識を育てる必要性—

吉備国際大学准教授 平見勇雄

私事で恐縮であるが、私は大学に就職してから、あと数ヶ月で21年目を迎えようとしている。私の大学は岡山県の備中高梁という田舎を拠点としており、キャンパスには就職した時から数人の留学生が在学していた。主に中国と韓国からの留学生である。東南アジアの学生も少し混じっていた。

しかし18歳人口の減少によって、就職してから数年経つと、毎年日本人学生の確保が難しくなり、大学入試も競争率が実質上なくなってしまう学部も出て来た。その後、定員割れを起こす学部も多くなった。

人口減少の波はまず地方がその影響を受ける。特に最近のように一人っ子が多くなり、景気の影響から経済的な余裕がなくなって親が地元の大学を受験させる家庭が多くなると、大学の数が多い都道府県では経営が厳しい状況に追い込まれる大学も出てくる。

私の高校時代は地元よりも都会に出たがる友人の方がはるかに多かった。女の子は家元からしか通わせないという考え持つ親に不満を持つ同級生も多かったが、次第に子供自身が家から通いたいと思うようになり、経済的な余裕などと関係なく、子供の意識が大きく変わったことは間違いのない事実である。

東南アジアからの留学生からは、どんどん外に出て知らない世界を見てみたい、自国だけでなく、世界を見てみたいという外向きの意識がみられる。それに反して、日本の学生は、内向きで、海外の留学生と比較して、全く意識が逆の様相を見せつけられているような気がする。

少子高齢化の流れを受けて、日本の高卒の受験生の数が限られてくる状況の中で、必然的に、その穴埋めは海外からの留学生の確保に向かわざるを得ない。それと同時に、国外に出てみたいという海外留学生が多いことから、私の勤務する大学は、学部によっては日本の学生よりも留学生がはるかに占有率の多い学部もある。

今までは、中国や韓国からの留学生にほぼ限られてきたが、今年はインドネシアやベト

ナムの留学生も多く入学してきた。

海外からの留学生を観察していると、個人差に加えて、民族性が感じられる。各国の留学生の国の事情や国勢だけでなく、学生の気質や道徳観の違いも分かる。

愛国心を持って、意欲的に生きている留学生の姿を見ていると、近い将来日本は、アジアの国からも完全に抜かれてしまい、間違いなく国際競争に負けてしまうのではないかと危惧してしまう。

私が所属する大学では、多くの先生方で、この認識が一致していることから、近い将来現実のものとなって我々に降り掛かってくることは間違いないと考えている。

一般的には、国民の生活が国家の枠を超えて、世界的な動きに結びつくことをグローバル化と言われている。アジアの新興国からの留学生は、力をつけて、国際競争力を高め、国力を上げていくことが期待されている、

私が勤務する吉備国際大学でも、岡山県内から通う日本の学生の比率が毎年のように増えている。英語の教育や教育内容を変える程度では、グローバル化に対応した即戦力は追いつかないように感じている。何よりも大切なのは学力的なことよりも、逞しい、ガッツのある強い精神力を育てることの方が優先するのではないかと考える。グローバル化に伴い、地球規模での相互連結性が高まり、異なる言語・文化・文明の接点が大規模に広がってきている。このことは、異なる倫理観・価値観の間での摩擦を産み出す危険性が高まっていくことを意味する。学校教育では、このようなグローバル化に対応できる人材育成が求められている。

中国では今や上海などの都会だけではなく、日本ではまだ中国の内陸は田舎だと思っているところにまで高層ビルが建ち並び、スマホ一つで日常の決済をすべて済ませてしまうやり方がかなりのパーセンテージで普及していると言われている。日本では考えられないようなスピードで現代化が進んでいるようである。

その意味で、教育の中身や内容だけに關心を向けるのではなく、現在のグローバル化した環境に対しての取り組みを視野に入れながらの対策を教員、行政、家庭と共に提示していく必要を痛感している

世界情勢が刻々と変化する中で、グローバル社会に生きる日本人には、世界の多種多様な人々と積極的にコミュニケーションを図っていくことが出来る資質・能力が求められている。日本の高校生や大学生は、東南アジアの留学生と比較しても、内向き思考で、自分の能力を発揮して、世界に羽ばたいて活躍する意識に乏しいように思う。

国際教育研究所の概要説明には、次の2点が書かれている。

1. 言語・文化の教育の根本は人間教育であることに留意しつつ、望ましい人間像、教師像を探求することを研究と研修の基本態度とする。
2. 世界の一員としての日本及び日本人はいかにあるべきか、という根本問題の解決を目指しつつ、国際理解教育の具体策を練っていく。

我が国の英語教育では、英語の実用的な技能面の教育に重きが置かれ、世界の一員とし

での望ましい人間像の探求には、あまり注意が向けられていない。このようなグローバル化に逆行した日本の現状を打破する為には、もっと幅広い視野を持った人間教育に力を注ぎ、世界市民意識を育てる教育にも、力を注ぐべきと考えている。このことは、まさに国際教育研究所の目指す目標でもあるので、会員の皆様方と共に励んでいきたい。

2017年度国際教育研究所第4回理事会議事録

日 時：2017年9月30日（土）13:00～14:30

場 所：公益財団法人 日本英語検定協会 B館 A大会議室

出席者：小田めぐみ、勝又美智雄、小原弥生、斎藤裕紀恵、鈴木政浩、
明神千代、山岸信義、平見勇雄、若林陽子、（9名）
毛利千里事務局長

欠席者：赤塚祐哉、笹島 茂、山野有紀、橘 広司、山本恭子、
白石よしえ、山崎 勝、井上裕子、片山七三雄、林 正人（11名）

司 会：勝又美智雄（副理事長）

書 記：斎藤裕紀恵

A. 報告事項

1. 第3回理事会で協議された、10月29日（日）に実施される、日本リメディアル教育学会英語部会と国際教育研究所との共催セミナー開催の概要を確認した。
2. ニュースレター第73号の発行の件
 - ① 報企画・運営委員会の平見勇雄主任担当理事のご尽力と会員の皆様方のご協力で、PDF版のニュースレター第73号が予定通り発行された。
 - ② PDF版の紀要発行に加えて、紙媒体の紀要第22号・第23号合併号の印刷を、北山印刷株式会社に依頼して、20部の紀要が発行された。

3. 国際教育研究所の活動報告

- ① 英語教育 10 月増刊号の「英語教育関係学会・研究会案内」には、当研究所の新組織に基づいた 20 名の理事の名前も含めて詳しく活動内容が掲載されている。
- ③ 英語教育 10 月号の通信欄には、「日本リメディアル教育学会英語部会・国際教育研究所共催：やる気を引き出す英語教育改善共催セミナー」の内容が詳細に掲載されている。

4. 新会員情報

- ① 7月22 日の月例会に初参加された、英国留学専門エージェントの株式会社ニュープレイス経営者の慶山豊治・絢子夫妻がそれぞれ当研究所の会員となった。
- ② 11 月の月例研究会で講演を依頼している同時通訳者の山本あゆみさんが当研究所の会員となった。

5. 来年度 7 月 28 日（土）に予知されている座談会に関する件

- ① 来年度に予定されている、英検上位合格者による合格体験発表とその発表内容に関する技能領域の各専門指導教員からのコメントを内容とする「教育問題を語る座談会」の企画に対して、英検協会から、英検成績優良賞授与者の人選関連でご協力が得られることになった。

6. 9 月 16 日（土）に、国際教育研究所の理事長と二人の副理事長で構成される幹部理事会では、次のようなことが協議された。協議内容については、理事会での承認を得て、当研究所のさらなる発展につながる運営に活かしていく。

- ① 共催セミナーの具体的な実施案や今後の当研究所の運営に関する協議。
- ② 国際教育研究所の組織の中で、研究部をどのように位置づけ、会員とのつながり、理事の先生方とのご専門分野のご指導の輪が広げられるかについて協議した。
- ③ 副理事長の鈴木政浩先生が、今まで長きに渡り、当研究所で研究部長

として活躍され、ご専門の「英語授業学研究」分野での本の出版計画がある中で、この度専門分野での科研費による研究が出来るようになった事を受けて、当研究所との今後の関わりについて協議した。

④ 国際教育研究所のHPの充実と拡充等について協議した。

⑤ 当研究所の理事会組織は、今年度発足したばかりで、組織として具体的取り組みをするには至っていない。このような現状を打破する為の考え方として、第1回理事幹部会で、勝又美智雄副理事長から「1点突破、全面展開」を実現する事を考えたらどうであろうか？との提言がなされた。

例えば、「理事の共通する専門分野の分類に関する編成案」などをヒントに、「CLIL型英語授業改善に焦点を絞った授業実践と研究の一体化に向けた取り組みをするような、共通する研究分野の共同研究の具体的企画の検討も考えられる。」等の意見交換もなされた。

以上の件は、必要に応じて理事会での検討課題としていきたいとの合意が得られた。

B. 第3回理事会での審議事項

(1) 月例研究会報告の執筆者変更の件

① ニュースレターに掲載される月例研究会報告は、今までは、月例会の司会者に執筆依頼をしていたが、7月例会からは、月例会の講師に、講演概要の執筆を依頼する事になった。

② 今までは、A4サイズ1枚の制限があったが、原稿の字数制限の指定はしないことになった。

(2) 2017年度国際教育研究所組織図では、実際の機能が果たしていないので一部変更し、実質的な運営機能を高め、下記のような審議が行われた。

① 現在の国際教育研究所の組織図には、5つの運営委員会があるが、各委員会のメンバーが集まって、任務を果たす体制作りが困難な状況にある。

- ② 5つの運営委員会の中で、現在活動している、広報企画・運営委員会と紀要編集・査読運営委員会の二つの運営委員会のみを組織に残す。
- ③ 残りの「月例研究会企画・運営委員会、座談会企画・運営委員会、共催セミナー企画・運営委員会」は、理事会主導で運営する。
- ④ 理事会主導で運営される、これら三つの運営委員会の企画・運営の原案は、理事長と二人の副理事で構成される「理事幹部会」で原案を作成し、理事会が企画運営委員会を兼ねて、実質的な運営母体として機能をさせて行く。

(3) 共催セミナー実施に向けての今後の予定

- ① 共催セミナー関係者との連絡を密にして、メールで情報交換や意見交換をする。
- ② 共催セミナー前日の10月28日(土)に、最終打ち合わせ会を、午後3時～5時の時間帯で、高田馬場駅前のカフェミヤマの会議室で行う。
- ③ 毛利事務局長と所長は、打ち合わせ会終了後に、英検協会の会議室で会場準備を行う。
- ④ 事前に当日参加者の名簿を発行する
- ⑤ 当日の外部講師には、お弁当を用意する
- ⑥ 参加者の名札を事前に準備しておく。

(4) 2018年度の月例研究会等の企画案

【報告】翌年の年間計画は、英検協会の会議室確保の関連で、早めに来年度の具体的な計画案を英検協会に提出する必要がある、毎年10月か11月中に企画案の概要を決める必要があります。

2018年度国際教育研究所月例研究会の年間テーマ

「グローバル化に向けた英語教育の多様な試み」

4月28日（土）第176回月例研究会

テーマ：「グローバル人材育成として求められている英語教育」
—学びを産み出す授業学の視点からの提言—
講師：山岸信義（国際教育研究所所長）

5月26日（土）第17回教育問題を語る座談会

テーマ：「日本人の海外研修から見える英語教育の課題」
提言者：慶山豊治・慶山絢子
株式会社 ニュープレイス（英国留学専門エージェント）

6月23日（土）第177回月例研究会

テーマ：「グローバル人材を育てるICUにおける英語教育」
—リーディングカリキュラムと教材—
講師：宮原万寿子（国際基督教大学准教授）

7月28日（土）第18回教育問題を語る座談会

テーマ：「英検上位合格者の合格体験談の発表と英語4技能の育成」
*当日のコメントをする担当者を決める

9月8日（土）第178回月例研究会

テーマ：「英語教育における“教え中心”から“学び中心”へのパラダイムシフト—学習者のオートノミー育成を目指した教師の役割と課題—

講師：小嶋英夫（文教大学教育学部教授）

<注意> 講師の都合で、9月は、第4土曜日ではなく、第2土曜日となる。

10月28日（日）グローバル人材育成教育学会との共催セミナー

テーマ：「中高大でのグローバル人材育成における英語教育の役割
—世界に通用する英語の総合力の養成—」（案）

* 来年度の当研究所との共催セミナーは、グローバル人材育成教育学会
に決まった。グローバル人材育成教育学会との交渉窓口は、その学会
の副会長の要職にある勝又美智雄先生にお願いする。

11月24日（土）第180回月例研究会

テーマ：「未来に生きる若者を育てる英語教師としての努力目標—学習者の
やる気を引き出し、英語の総合力を付ける授業実践—」

講師：田口 徹（明治学院大学非常勤講師、
元千代田区立九段中等教育学校教諭）

（注意）本来であれば、179回月例研究会となるのですが、特別企画の10
月28日（日曜日）を第179回の月例会とみなして、11月24日
（土）の月例研究会は、第180回とさせていただきます。

（5）平成29年度 紀要 第24号執筆予定者

2017年度の月例研究会での講師・共催セミナーでの講演者にも
紀要第24号の執筆依頼をすることになった。

1. 斎藤裕紀恵先生（早稲田大学・明治大学兼任講師）
2. 勝又美智雄先生（国際教養大学名誉教授）
3. 小田めぐみ先生（国際短期大学）
4. 田中ケアリー先生（東京外国語大学講師）
5. 太田辰幸先生（元東洋大学教授）
6. 山本あゆみ先生（同時通訳者）
7. 鈴木政浩先生（西武文理大学専任講師）
8. 猪狩保昌先生（東京都立羽村高等学校教諭）

9. 柳沢順一先生（芝浦工業大学講師）
10. 他（会員からも紀要原稿募集中）

- 最終的な執筆予定者はまだ確定していない。
- 紀要第24号は、年度内の2018年3月を発行予定にしている。
- 紀要編集・査読運営委員長は、勝又美智雄先生、副委員長は鈴木政浩先生となっているが、その他の紀要編集委員には、ご勤務の関係でのご都合をお聞きした上で、編集委員の再編成も考える。

2017年度国際教育研究所第5回理事会議事録

日 時：平成29年11月11日(土曜日) 13:00～14:30

場 所：公益財団法人 日本英語検定協会 B館 A大会議室

出席者：勝又美智雄、小原弥生、田中ケアリー、山崎 勝、山岸信義（5名）
毛利千里（事務局長）、

欠席者：赤塚祐哉、笹島 茂、平見勇雄、山野有紀、橘 広司、山本恭子、明神千代、
井上裕子、片山七三雄、白石よしえ、鈴木政浩、林 正人、小田めぐみ(10名)

司会：勝又美智雄（副理事長）

書 記：山崎 勝

A. 報告事項

1. 第4回理事会での連絡事項や審議事項についての報告がなされた。
2. 当研究所会計担当の毛利千里事務局長より、2017年度会計として、9月の中間報告がなされた。
3. 共催セミナーでの受付担当の毛利千里事務局長から、10月29日（日）のセミナー参加者について、下記のような報告がなされた。

共催セミナー参加者	31名
内訳	
会員	15名（講演者、パネリストを含む）
学生	3名
一般	13名
講師	3名

4. 会計担当の毛利千里事務局長より、2017年度共催セミナー収支報告がなされた。
5. 理事長より、次のような共済セミナー総括の発言があった。

理事の先生方を中心に、周到的な事前準備がなされ、プログラムの中で発表された先生方の評価も高く、白熱した話し合いが展開された。共催セミナーは、幸い多くのご参加者にご好評を頂き、実りある内容であった。台風の影響が予想される中で、新潟、名古屋、大阪、京都、高知など全国から多数の参加者があり、充実した共催セミナーが開催出来た。アンケート結果を見ても、当日のプログラムのどの項目にも、殆どが「大変良かった」の欄に丸印があり、感謝の言葉が書かれている。

- (1) 総合司会者の斎藤先生、第2 二部司会者の白石先生のみごとで臨機応変な進行役と理事の先生方や会員の積極的な発言、さらに、講演者、提言者、授業実践発表者、シンポジウムの登壇者のすべての関係者の良きご準備の成果が発揮された。
- (2) 殆どの参加者は、次回の当研究所主催の共催セミナーには「参加したい」項目に丸印がなされていた。反省点としては、「資料が一つになっていたら見やすかった」との感想が書かれていたので、次回はこの反省を活かしていきたい。

B. 第5回理事会での審議事項

1. 来年度の月例研究会企画を立案する件

- ① 座談会の名称をやめ、全て「月例研究会」の名称に統一する
月例研究会の名称で、座談会形式の内容を含めることは可能。
- ② いつもお世話になっている英検協会のスタッフの方々に、年に1回は月例研究会でご講演をして頂くようお願いする。
- ③ 共催セミナーの実施に当たっては、他学会に働きかけて、共催セミナーの参加希望を公募することも考えていく。

- ④ 月例研究会は、会員の為の研究会が主体となるので、今後は、実践発表者や講演の講師は、可能な限り会員から募るようにする。

2. 平成30年度月例研究会企画（案）

2018年度国際教育研究所月例研究会の年間テーマ

「グローバル化に向けた英語教育の多様な試み」

4月28日（土）第176回月例研究会

テーマ：「グローバル人材育成として求められている英語教育」
—学びを産み出す授業学の視点からの提言—
講師：山岸信義（国際教育研究所所長）

5月26日（土）第177回月例研究会（案）

テーマ：「日本人の海外研修から見える英語教育の課題」
提案者：慶山豊治・慶山絢子
株式会社 ニュープレイス（英国留学専門エージェント）

6月23日（土）第178回月例研究会

テーマ：「グローバル人材を育てるICUにおける英語教育」
—リーディングカリキュラムと教材—
講師：宮原万寿子（国際基督教大学准教授）

7月28日（土）第179回月例研究会（案）

テーマ：「日本英語検定協会がグローバル人材育成で目指していること」
—海外研修・海外留学・各種セミナーの開催・その他—
講師：公益財団法人 日本英語検定協会理事長

9月8日（土）第180回月例研究会

テーマ：【英語教育における教え中心から、学び中心へのパラダイム・シフト】
—学習者の自律的成長を促す教師の役割と課題—

講師：小嶋英夫（文教大学教育学部教授）

<注意> 講師の都合で、9月は、第4土曜日ではなく、第2土曜日となった。

10月27日（土）第181回月例研究会

テーマ：「未来に生きる若者を育てる英語教師としての努力目標—学習者のやる気を引き出し、英語の総合力を付ける授業実践—」

講師：田口 徹（明治学院大学非常勤講師、
元千代田区立九段中等教育学校教諭）

11月18日（日）グローバル人材育成教育学会との共催セミナー

① 来年度は「グローバル人材育成教育学会との共催セミナー」に決定した。

勝又先生は、グローバル人材育成教育学会の副会長の要職に就かれておられるので、来年度の共催セミナーでの他学会との連絡窓口は、勝又副理事長にお願いすることになった。

具体的には、1月末までに、全体テーマ、講演会のテーマ、講演会の講師選定、司会者の選定、シンポジウムの企画などを、勝又先生を窓口にご検討頂く事になった。

② 例年の共催セミナーは、10月の第4日曜日を予定しているが、来年度は諸般の事情で、11月18日（日）の実施に決まった。

（注意）特別企画の11月18日（日曜日）は、月例研究会扱いと

なり、第182回とみなされるので、2019年度の4月の月例研究会は第183回として、月例研究会がスタートすることになります。

第173回月例研究会報告

2017年9月30日(土)の月例研究会では、「グローバル社会における異文化間コミュニケーション」一東洋大学アジア文化研究所での研究成果を踏まえて一と題して、講演をさせて頂いた。以下、その時の講演概要を書かせて頂きます。

1. グローバル化の進展につれ国際間の人的、物的交流の爆発的増加に伴って異文化コミュニケーションが大きな課題となってきました。異文化コミュニケーションとは、いうまでもなく異なる文化間のコミュニケーション、ないしは文化がどのようにコミュニケーションの在り様に作用しているかを扱うディシプリン(研究分野)であります。この分野は言語、文化・社会を含む実に大きな、かつ重要なテーマで、限られた時間、スペースで総合的に取り扱うことはほとんど不可能といっている作業です。本報告は、「言語は文化」、「文化はコミュニケーション」(いずれもその逆も可)など言語学、文化人類学などの諸説に従い、言語が考え方や行動に影響し、文化・社会パターンを規定し、国の政治・経済・社会現象などを特徴づけているのではないかと、との問題意識に基づいています。そこでコミュニケーション手段である言語の重要な構成要素である伝達速度が文化・社会問題の発生、特性化に関与していると想定し分析を試みました。ここでは、わが国の社会・文化的特徴を反映している日本語(あるいは日本語の特性を反映している日本の社会文化)の遅い伝達速度がわが国の当面の6つの問題に背景に少なからず関わっているのでは、と検討してみました(6つの問題とは、経済分野の(1)バブル崩壊後の経済停滞、(2)わが国産業の低い生産性)、国際交渉・取引分野の(3)対外発信力の弱さ、(4)定評ある外交下手、教育分野の(5)国際水準以下の大学教育・研究、(6)国際的低水準の英語力)。
2. ここで2008年秋、米国大統領選挙のオバマの勝利宣言の四か国語(英、独、仏、日本語)のテキストを実験材料にスピーチ速度を計測してみたところ、スロー、ノーマル、ファーストの三つの速度において英語が最も速く、全体的に日本語が最も遅い結果を得ました。この遅い日本語の伝達速度が主にわが国の文化・社会的コンテキストにおいて、どのようなインプリケーションをもつだろうか、10項目ばかり挙げてみました。即ち、伝達速度が遅い言語では、

- 一定の時間内に伝達される情報量は、伝達速度の速い言語に比べて明らかに少ない。したがって Slow な伝達速度での交渉は、一定時間に十分な量の情報を提供するうえで不利な立場にあるかもしれない。
 - 緊急時においては限られた時間にタイムリーに、適切に意思疎通を行い、敏速に対応することは Fast な言語に比べてより困難になるだろう。
 - 多くの場合、一定時間内の情報量の交換が十分でないことから議論・交渉が長引いて時間を浪費し、合意し、ないし代替選択肢の決定に達するまで長時間を要しがちになり、「外圧」などで決定を迫られると、窮地に陥り、上策でない政策を選んでしまうことになりかねない。
 - 伝達される情報量が少ないため、十分な理解、納得に至らないまま話合いが中断することが多いことから、誤解を招くことを恐れ、控えめ、内向的に傾向になりがちになることが考えられる。このことが日本文化の non-verbal (非言語的) な特性の形成の一要因とも考えられ、また日本社会のグループ志向性と関連している可能性がある。
 - 伝達速度の遅い言語では、限られた時間内に十分な情報量を交換できないために人間関係やビジネスの取引関係を築くにはより多くの時間を要することになるだろう。
 - スローな言語では十分な情報伝達量が交換できないため、単なる通り一遍の言葉だけでは相手、周囲の納得が得られず、また限られた会議では十分な周知、合意が得られない、また組織として機能しないことになるため、日本社会の特徴的な現象である合意形成のための念入りな裏工作(「根回し」や「本音」と「建て前」のギャップ、さらには「義理」といわれる社会的義務が生むことにもなりかねない。これは一つには日本人の間では、言語伝達では十分に真意、誠意が伝えにくいことから、より行為を重視することになりかねず、非言語文化形成の要因にもなる。
 - Slow な伝達速度の日本語だからこそ、論理によって表現するよりも、情緒的感情、感性に訴える短い表現形式を発展させた。これが自然への一体感、自然を愛する感情を高め、それが俳句や和歌などのみじかい詩を生み出すことになったこととも無関係ではないかもしれない。
 - Slow な伝達速度で話すと Fast で話すよりも説得力が弱まるという米国の研究例がある。もともと理解力という点では slow で話すほうが理解力は増すようだ(Miller et al. 1976)。
 - Slow な伝達速度の言語では、コミュニケーションや論理展開、プレゼンが Circular になる傾向があるといわれる。つまり、欧米言語表現に比べ直截的表現を避ける傾向があるため、コミュニケーションが長引き、廻りくどくなり、往々にして焦点が曖昧になり易い。
 - 自由化が進み、技術進歩が一段と加速化し、国際競争が激化するグローバル社会において、意思決定のスピード・アップがますます求められている。この点でもスローな伝達速度の言語はファーストな言語に比べて不利になりかねない。
3. ここで従来 of 代表的な日本文化論をふまえ、日本人、日本文化社会の志向性の特徴を

まとめてみると、(1) 和の尊重、(2) 閉鎖的、内向き志向、(3) 非言語文化、(4) 自然との調和、一体化志向、(5) 権威への盲目的崇拜傾向、の5つが挙げられます。上記インプリケーションの多くはこれら日本文化社会の特徴を反映したものとみることができるのであり、その根底には、日本語の伝達速度が遅いために一定時間内の情報伝達に制約が生じやすいことがあるのではないかと考えられます。

4. 大陸から長らく隔絶された島国で独特な、好ましい多くの特徴をそなえた日本文化が生まれました。そのような文化社会的環境のなかで、国家の発展を目指し、政府と企業が一体になったようなわが日本株式会社(Japan, Inc.)は、政府の手厚い保護のもとで企業が成長し、経済は奇跡的な経済発展を遂げました。しかし90年代に入り、グローバル化が進み、国際交流が劇的に増加し、国際競争が激化した新たな国際環境に対処するには、わが国文化の長所でもあった特徴が異文化コミュニケーションにとって必ずしも好ましくない面もみられます。伝達速度の遅いことが日本文化の基本的パターン形成に関係しているとしたら、対外交渉においても日本語の伝達速度の遅いことの負の側面について理解し、コミュニケーション能力、交渉・取引能力向上の重要性の認識を深める必要があるのではないかと思います。

主要参考文献

- 相田洋・宮本祥子・茂田喜朗・藤波重成(1999).「マネー革命」I, II, III NHK 出版
- 赤羽雄二(2015).「速さはすべてを解決する」ダイヤモンド社
- 池尾和人・永田貴洋、第6章「銀行:規模に隠された非効率」[www.mof.go.jp / pri / research / conference / zk030 / zk030f.pdf](http://www.mof.go.jp/pri/research/conference/zk030/zk030f.pdf)
- ウォルフレン、カレル・ヴァン(1994)「人間を幸福にしない日本というシステム」毎日新聞社
- Geertz, Clifford (1973). *The Interpretations of Culture*. Basic Books.
- 吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳(1987)「文化の解釈学」[I], [II], 岩波書店
- 熊野純彦(2009).「和辻哲郎 --- 文人哲学者の軌跡」岩波新書
- Kramsch, Claire(1998), *Language and Culture*, Oxford University Press.
- Miller, N., G. Maruyama, R. J. Beaber, and K. Valone(1976). “Speed of Speech and Persuasion”, *Journal of Personality and Social Psychology*, vol.34, No.4, pp.615-624
- Niitobe, Inazo(1905). *Bushido -The Soul of Japan*. (originally published in 1905 by G.P. Putnam’s Sons, New York. First ICG Muse edition, 2001.
- 阪倉篤義「日本の知性と日本語」、相良・尾藤・秋山編(1983)「講座日本思想2・知性」東大出版
- E.サピア (Edward Sapir)(1983). 「言語・文化・パーソナリティ」平林幹朗訳、北星堂
------(1998). 「言語:ことばの研究序説」安藤貞雄訳 岩波文庫
- 司馬遼太郎、山崎正和 (1978).「日本人の内と外」中公新書、中央公論社
- 外山滋比古(1980).第12章「日本語の特質」、pp.302-324. 講座 比較文化 第7巻、高階秀爾『日本人の価値観』、研究社 所収
- Tyler, E. B., (1871/1924). *Primitive Culture*, 7th ed. Brentano,

- 土居健郎 (1971).「甘えの構造」弘文堂
- 中根千枝(1967).「タテ社会の人間関係:単一社会の理論」、講談社現代新書
- 芳賀綏(2004).「日本人らしさの構造——言語文化論講義」大修館書店
- (1999).「主語と日本人」講談社学術文庫
- ベネディクト、ルース(R. Benedict).長谷川松治訳「菊と刀」、社会思想社 1989 年 37 版
- ホール、エドワード(E. Hall)(1959). *The Silent Language*.
- & Mildred R. Hall(1987). *Hidden Differences : Doing Business with the Japanese*.
Anchor Books, Doubleday
- 和辻哲郎(1949).「倫理学」上、下巻, (「倫理学」全 4 冊(2007)岩波文庫)
- (1992).「日本精神史研究」岩波文庫
- 山本七平(1989).「日本人とは何か」上・下。PHP 研究所
- (2009).「空気の研究」21 版、文芸春秋社

文責:太田辰幸(東洋大学元教授)

第 175 回月例研究会報告

2017 年 11 月 11 日(土)の月例研究会では、「グローバル人材に求められる英語力ー同時通訳者の立場からの提言ー」と題して、会議通訳者として 20 年以上におよぶキャリアおよびクイーンズランド大学通訳翻訳修士課程(オーストラリア)において習得した通訳翻訳理論研究に基づいて説明させて頂いた。講演では、グローバルな異文化コミュニケーションと通訳翻訳理論の親和性の可能性、複数言語・文化におけるシフト(ギャップ)のとらえ方を中心に、以下の通り 3 つの主な理論をご紹介した。

- Foreignization (Foreignizing Approach)
- Domestication (Assimilative Approach)
- De-verbalization (Theory of Sense)

Foreignization は、Lawrence Venuti 他に提唱され、異化とも呼ばれる。一般的な言葉で言えば、直訳に相当する方略で、意識に相当する Domestication と相反する概念と通常考えられている。Foreignization では、起点言語の筆者(話し手)をできる限りそのままにし、目標言語の読者(聞き手)をそれに近づける。そのため、当然異質さが残ることになり、翻訳を通じて言語を豊かにする点がポジティブにとらえられると共に、読みやすさが悪化するというリスクがある。一方、Domestication は、Eugene Nida 他に提唱され、同化とも呼ばれる。Domestication では、目標言語の読者(聞き手)をできる限りそのままにし、起点言語の筆者(話し手)をそれに近づける。そのため、目標言

語の文化や価値観を課されることになり、読みやすいテキストとなるが、解釈の追加や翻案に変化してしまうといったリスクがある。Danica Seleskovitch の Theory of Sense は意味の理論と呼ばれ、言語の変換ではなく、De-verbalization (非言語化) を通して、意味を伝えることが理論の中核にある。

このような理論をご紹介した上で、出席者参加型で実際に複数言語・文化におけるシフト (ギャップ) のとらえ方をご体験いただいた。課題は「つまらないものですが、どうぞお納めいただきたく、季節柄、くれぐれもご自愛ください」という贈り物に添えるカード (レター) の英語表現についてだが、理論を具現化するべく、「つまらないものですが・・・」といった起点言語の日本の文化の異質性を残した Foreignization と目標言語の文化や価値観を反映した Domestication のアイデア” Season’s Greetings” など、双方を出席者に発表していただくことができた。

月例研究会では、諸先輩の方々に長時間ご拝聴いただき、心から感謝している。また、最後に同時通訳の現場に関して多くのご質問をいただいたことを大変ありがたく思う。この機会を通して、同時通訳の理論や実践から、グローバル人材の育成という課題において、新しい何かに気づくといった示唆があれば幸いであり、最後に、同時通訳者という職業の発展の上においても、今回のような講演の機会を設けていただき、ご出席者の皆様にご理解を深めていただけたことは非常に有意義であったことを付け加え、末筆とさせていただきます。

文責：山本あゆみ (同時通訳者・日本通訳翻訳学会所属)

国際教育研究所 2017年度 (平成29年度) 9月会計中間報告

2017/04/01~2017/09/30

収入の部

前年度繰越金	322,197円
(賛助団体29年度会費70,200円と29年度年会費8名分40,000円を含む)	
29年度会費	95,000円 (@5,000円×19名)
28年度会費	15,000円 (@5,000円×3名)
27年度会費	5,000円 (@5,000円×1名)
月例会参加費 (第169~173回)	64,500円
銀行利息	1円

合計 501,698円

○29年度会員総数 名誉所長1名、顧問2名、会員43名、賛助団体1
○29年度新入会員 若林陽子、金岡正浩、羽成拓史、小田めぐみ、田中ケ
アリー、
白石よしえ、赤塚祐哉、山野有紀、斎藤裕紀恵、小
原弥生、
柳沢順一、山本あゆみ、慶山豊治、慶山絢子

支出の部

郵送料	6,864円(20,000円)
事務費(コピー代等)	29,505円(20,000円)
月例会講師謝礼(9月)	10,000円(20,000円)
同 交通費	3,000円(0円)
月例会会場使用料(4,5,6,7月)(英検)	31,212円(75,000円)
紀要印刷、製本代	27,756円(20,000円)
合計	108,337円 ()内は予算額

9月30日現在繰越金 393,361円

以上の通り報告いたします

2017年11月11日

会計 毛利千里 印

2017年度国際教育研究所新年会のお知らせ

今年も残り少なくなりましたが、会員の皆様方におかれましては、お元気でご活躍の事と思います。今年から運営母体が、運営委員会から理事会に変更になり、組織を挙げて取り組んできました、月例研究会と共催セミナーも、幸い多くのご参加者からご好評を頂き、今年度の行事を終了する事が出来ました。これも、ひとえに、理事を含めた会員の皆様方のご協力の賜物と感謝しております。

当初は、今年の締めくくりに忘年会を計画していましたが、諸般の事情で日程調節が困難となり、忘年会の代わりに、下記の要領で1月7日に新年会を開催することになりましたので、ご案内させていただきます。

2月か3月に総会を予定していますが、新年会では、飲食を共にしながら、雑談形式で、今後の当研究所のさらなる発展に向けてのお互いの思いを語り合えればと思っています。発展につながる共通の思いは、是非総会での議案に反映出来ればと思っています。

多くの会員の皆様と新年会で再会出来ますことを、楽しみにしています。

2017年12月吉日 国際教育研究所 理事長・所長 山岸信義

国際教育研究所新年会のお知らせ

日 時：2018年1月7日（日） 17:00～20:00

場 所：JR 高田馬場駅徒歩2分 居酒屋 ◎二重丸
東京都新宿区高田馬場4丁目8-7 花川ビル6階
電話： 03-5338-6901

会 費：3,500～4,000円

申込先：山岸信義 (yyama300@mbd.ocn.ne.jp) 電話：090-1454-7901

備 考：●出欠のお返事は、予約の関係で、12月23日（土）までに、山岸所長まで
メールまたは電話でお知らせください。

●参加者には、場所の案内をさせていただきます。

編集後記

今年もいよいよ押し迫ってまいりましたが、会員の皆様方には、公私ともどもご多端なことと思います。

今年は国際教育研究所が新しい体制となり、以前と違った雰囲気が強く感じられます。私自身が、広報企画・運営委員会の主任担当理事として、当研究所のニュースレター発行に携わるようになったことも、不思議なご縁を感じます。

私が国際教育研究所の月例研究会に初めて参加させていただいたのは数年前でした。大修館書店発行の英語教育という雑誌に掲載されていた当研究所の月例研究会の案内を見て参加したことがきっかけで、今日に至っています。

月例研究会は年に7回あったように思いますが、1年に一度しか出席できないことが多かったにもかかわらず、アットホームな雰囲気を感じました、月例

研究会の質疑応答の時に、たとえ考え方が違っても、相手の意見を真剣に傾聴し、お互いに気軽に向き合って話し合える雰囲気の魅力を感じて、国際教育研究所の月例研究会に出席するようになりました。

今回紀要第75号の巻頭言は、ニューズレター編集責任者の私が、今回の巻頭言ご執筆者への連絡が遅れた事への責任を取る形で、私が執筆させて頂きました。

巻頭言で私が書かせて頂いた内容は、以前から私が痛感していた内容の一部です。会員の皆さんと思いが共有出来れば嬉しく思います。

最近では細かな分析よりは俯瞰的な側面から物事を見る癖がついてしまいました。それがいいことなのかどうか実はわからないのですが、年齢を重ねたからでしょうか、細かなことよりも全体的に見てどうなのかに関心が向いてきました。自分が書く論文もまさにそんな感じです。

今回の月例研究会報告では、9月30日の第173回の次に開催された、11月11日の月例研究会が、174回ではなく、175回となっていますが、これは、10月29日に開催された共催セミナーを第174回月例研究会とみなして考えているからです。

しばらくは、新体制への移行のために模索が続くと思いますが、会員の皆様方の積極的な参加で、国際教育研究所のさらなる発展につながるように、当研究所の活動を盛り上げていきたいものです。

12月10日 平見勇雄